

大井実の
BOOKな話

福岡市内で書店『ブックス
キューブリック』をいとなむ
大井実さんの、本のある日
常をつれづれに。

撮影／川上信也



谷川俊太郎という偉大な詩人と、
その作品にじっくり触れてみませんか。

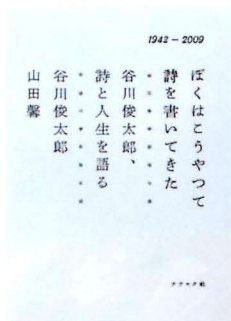
先月に引き続き、詩をテーマに選んでみました。今回は、詩人・谷川俊太郎の『ぼくはこうやつて詩を書いてきた 谷川俊太郎、詩と人生を語る』という分厚い一冊です。谷川俊太郎については、誰もがその名を知る偉大な詩人である一方、その人物像は名前ほど知られていないように思えます。この本は谷川さんと、彼が親友と呼ぶ編集者との対談集。名作誕生の裏側から3度の結婚・離婚まで、谷川さんのすべてがわかる興味深い名著です。

イベントなどで何度か谷川さんにお会いしたことがあります。とても気さくでフレンドリーな印象。反対に、クールで感覚的な彼の詩は、まるで抽象的な絵画のようで、僕は谷川さんの作品に触れるたびに、この人は単なる詩人というよりアーティストだとしみじみ感じます。翻訳をしたり絵本をつくったり、芸術家とコラボして作品を手がけるなど、詩人の枠にとらわれず

多面的に活動するマルチな才人。これを読めばそんな谷川俊太郎の姿がわかるし、収められた88篇の詩と自身による解説で、谷川ワールドをあますところなく楽しめるに違いありません。この本は一気に読むより、たとえば夜寝る前に少しづつ読む、いわゆる「スローリーディング」がおすすです。何か月かかけてちびちび谷川俊太郎を味わい、その素晴らしさを実感していく、そんな感覚でしょうか。

アーティストイックつながりで選んだ詩的な映画が、アンドレイ・タルコフスキー監督の『ノスタルジア』。なにより映像の美しさが際立つ大好きな作品です。たとえば霧がかかった風景から、ゆっくりゆっくり霧が晴れていく冒頭のシーン。それを観ただけでぞくぞくするというか、映像美に引き込まれて…。谷川さんの盟友であった作曲家の故・武満徹がパンフレットで絶賛していたのも強く印象に残っています。

『ぼくはこうやつて詩を書いてきた 谷川俊太郎、詩と人生を語る』
谷川俊太郎・山田馨／ナナロク社／2,800円（税別）



『ノスタルジア』
'83年ソ連、イタリア／126分 ※著作権の関係で今回はパッケージ写真は掲載いたしません。ご了承ください。